



福 井 県 知 事 賞



私の後悔、そして願い

坂井市立三国中学校 3年
向 野 一 愛

みなさんは、なくし物をしたとき、どうしてほしいですか。放っておいてほしいですか。それとも一緒に探してほしいですか。私は間違いなく後者です。そんなこと、考えなくても即答できることなのに、あの日の私は、その答えにふたをし、知らない顔をしたのです。

今年の冬の終わり、私は友達八人とレジャー施設へ遊びに行きました。そこはお金を払ったレシートを見せれば、出入り自由な場所でした。午前中は息が切れるほど走ったり、大声で笑い合ったり、とても楽しい時を過ごしました。お昼になり、ご飯を食べるため外へ出ようと、レシートを見せ次々とゲートをくぐりました。すると一人の友達が、「ごめん、レシートなくしてもた。先行ってて、私トイレやら色々探してみるで。」そう言って今通ってきた道に戻って行きました。私たちがご飯を食べていると、ラインがきました。

「ごめん。探したけどなくて、私お腹すいてないから、ここで待ってるね。」

私たちは食べ終わり、戻ってまた夕方まで遊び解散しました。帰りの車の中、黙っている私に、母は言いました。

「どした。楽しくなかった。何かあったの。」

「何でもないよ。楽しかったよ。」

私は何度もそう言おうと笑顔だけは作っているのに声にならず、気付くと私の手の甲には、ボタボタと大粒の水滴が流れ落ちていました。

「なぜあの時、一緒に探そうと一歩踏み出せなかったんだろう。みんながわいわい楽しんでいる場所で、彼女は一人ぼっちで、どんなに不安で悲しくて、淋しかっただろう。」私の心は、彼女に背を向けたあの瞬間から、ずっとずっとチクチクと痛みを発していたのに、私はその痛みをふたをして、気付かないふりをしたのです。

「自分がしてもらってうれしいことを、お友達にもしてあげてね。」

母は、私が小さい頃から今も、そしてあの日も、呪文のように毎朝そう言って、私を送り出してくれました。今まで私は、その言葉をうるさいなあぐらいにしか聞いていませ

んでした。でもあの日、全てを私から聞いた母は、私の手を握り、一緒に肩を震わせ泣いてくれました。その時なぜだか、ズキズキ痛くて仕方なかった私の心の中が、ほんの少しですが、ふわっと温かくなった気がしました。母がずっと言っていたのは、こういうことだったのかもしれないと、感じる事が出来ました。

「自分がしてもらいたいと思うことをするね。」

今までは母から私への一方通行だった言葉が、あの日以来、私と母の合言葉になりました。

今、私には大好きな曲があります。

「人が痛みを感じたときには、自分のことのように思えるように…」

という歌詞が、毎日口ずさむくらい大好きです。強くて、優しさがあふれている歌詞です。そして、母が私に教えてくれたことです。

あの経験を経て、最初は彼女への後悔ばかりだったけれど、少し時間が経った今私は、私と母の合言葉を、私の大好きな友達や先生方、町の人、そして世界中の人々に知ってもらいたいと思うようになりました。世界中の人々が、自分がされてうれしいことだけを、相手に言ったりしたりするようになれば、心ない誹謗中傷やいじめ、差別、ひいては戦争も「なくなる」ではなく「できない」になると、私は確信します。あの日、

「私なら一緒に探してほしい。一緒に探そう。」

私の心はそう叫んでいたのに、彼女の笑顔が不安で一杯だったと気付いていたのに、私は逃げてしまいました。その後悔を一生忘れず、私は強く生きていきます。今度は絶対に、大好きな人を守りたいから。そしてもう一つ、私と母の合言葉が、今日出会ったみなさんから、みなさんの大切な人へと伝わり、世界中の合言葉になってくれることを、私は願います。